1920年、アメリカで女性に参政権が与えられ、女性の社会進出が進む。

ウォール街大暴落を機に世界恐慌が始まる。各国でファシズムや軍国主義が台頭。

1939年に第二次世界大戦が開戦。世界的に物資が乏しくなる。

戦後の好景気が到来。日本では「もはや戦後ではない」という言葉が生まれる。

若者がグローバルに活躍し始めた時代。日本は高度経済成長期を迎える。

イギリスで労働者階級の人々が社会に対する強い不満を表現する。

1920 1930 1940 1950 1960 1970

1920s

女性観を大きく更新する直線的なシルエット

第一次世界大戦中、男性に代わって戦後を守る形でテーラードジャケットやスーツを着て社会進出を果たした女性たち。戦後、因習や束縛から解放され、動きやすい服を選ぶようになっていきます。特に画期的だったのは、先駆けて1913年に「シャネル」のコレクションに初登場していたジャージー素材。芯も裏地もないシンプルなスーツが実現し、コルセットも不要に。以降、1920年前後に流行したアールデコ様式と連動する直線的でボーイッシュなシルエットが女性観を更新し、服飾のモダニズムが推進されます。

1929年に撮影されたガブリエル・シャネルの姿。体のラインを自然に、緩やかにカバーするシルエットは、女性に衝撃と感動を与えました。

1940s

戦争が影を落とす社会に現れた"希望と夢のスタイル"

1940年、ドイツに占領されたパリからはファッションが消え、世界的にも物資が乏しくなった時代。ファッションは軍服の影響を受けたベーシックなテーラードスタイルが主流になります。日本では「贅沢は敵だ」というスローガンが掲げられ、女性たちはもんぺを自分で縫い、修繕を施しながら着用していました。第二次世界大戦終戦後の1947年、パリでクリスチャン・ディオールが"コロール(花冠)ライン"を発表。構築的なラインは新しい時代の到来を表現する"ニュールック"として、世界に希望と夢をもたらしました。

「女性がホテルのバーで楽しめるように」という思いを込めて命名された"バー"ジャケットのルック。1948年開催の「ディオール」のショーより。

1950s

明瞭なラインと、快適な着心地。対比するふたつのエレガンス

クチュリエとして活躍したクリストバル・バレンシアガが1950年代に発表したスーツ。巧みな技術で美しいラインを構築しながら快適さも実現。

「ディオール」が半期ごとに発表する"ライン"の影響によってチューリップライン、Aライン、Yライン、アローラインなど、トレンドがくるくると変わり、あらゆる"ライン"のジャケットが提案されます。"立つ"眼鏡のようなフォルムに体が入ると、トップモードを体感することができました。一方「衣服のエレガンスは動きやすさにある」という信念を曲げなかった、ガブリエル・シャネル。芯を抜えた柔らかい生地にシルクの裏地とブラウスという仕立て方を守り、服の機能性を重んじたアメリカの女性たちの間で人気を博しました。

Jacket Style of 1930s

不況を投影するジャケットとともに、パンツスタイルが躍進

モード界では、シュールリアリスムを取り入れたエルザ・スキャパレリが人気を博します。肩にパッドを入れ、ウエストを絞めたジャケットは、まるで不安に備えた防御服のようです。また、マドレーヌ・ヴィオネがバイアスカットを発表したことで、流麗で細いシルエットが流行。カジュアルジャケットに細身のスカートやパンツを合わせるスタイルが注目を集めます。

1932年に映画デビューしたキャサリン・ヘプバーンは公私でジャケットにパンツを合わせたスタイルを好みました。写真は1950年代の一枚。

Jacket Style of 1960s

ボトムスの選択肢が広がりジャケットスタイルの幅が拡張

前半は、ロンドン発ユースカルチャーを背景にシンプリシティを表現したジャケット。中期は、構築的でボックス風のシルエット、後期はユニセックスなスタイルへと流行が移り変わります。なかでもイヴ・サンローランが発表した"サファリジャケット"は画期的で、ジェンダー平等社会の推進をファッションであと押ししました。

(右)ミニスカートとの合わせを流行させたマリー・クワント。(左)イヴ・サンローランの"サファリジャケット"。パンツと婦人服にスタイリングされ、女性のパンツ着用が促進されました。

Jacket Style of 1970s

次々とトレンドが生まれファッションの表現が豊かに成長

エマニュエル・ウンガロが提唱する「パターン・オン・パターン(柄に柄を合わせる)」の表現も加わって、ファッションは百花繚乱。アメリカ西海岸発のヒッピーカルチャーの影響も受けた「重ね着がおしゃれ」というレイヤードルックも登場しました。ロンドンではパンク旋風が吹き荒れ、ジャケットに合わせる靴やブーツが多様化します。

いつもそこには大胆な発想がありました——

時代と対話する「ジャケット年代記(クロニクル)」

いまや私たちのワードローブに欠かせないアイテムとなったジャケットですが、もとをたどれば紳士のために作られたもの。女性のファッションに根付くまで、そして私たちが心地よくまとうことができるようになるまでには、時代を読み、クリエイティブの力で適応させようと工夫を重ねた、先人たちの活躍がありました。

Photo/Alfa, Getty Images

ジャケットの選択が「社会に向き合う姿勢」を表現する時代に

年代記監修・文=中野香織(服飾史家)

西洋のファッション史において、女性のジャケットの歴史はそれほど古いものではありません。

女性用ジャケットが登場するのは18世紀。上流階級の女性の乗馬服として流行します。男性服からの借用でもあった機能的で安全なジャケットは、旅行用の服として、また領地での散歩着としても着用されました。つまり、外で比較的自由に活動するための服として、彼女たちはジャケットを着用したのです。

19世紀になると、スポーツやレジャーが中産階級にも広まります。

1980 — 世界的な好景気。女性が管理職になる時代が到来。英国で女性首相も誕生。

1990 — バブルが崩壊。湾岸戦争やソ連の崩壊が起こり、世界平和に関心が集まる。

2000 — 2008年にリーマン・ブラザーズが破綻。世界経済が打撃を受ける。

2010 — 社会的マイノリティの権利向上に対する意識が高まる。心の健康も重視する時代に。

2020 — 多様性と包括性の考えが浸透。新型コロナウイルスが世界的に蔓延する。

2024 — 気候変動の影響により世界で異常気象が顕著に。「新たな生活様式」も定着。

1980s

好景気と女性の社会進出がファッションに反映

世界が好景気に沸いた時代。カルチャーシーンにも投資が集まり、モードの世界ではありとあらゆる実験的な試みが行われます。なかでも、アズディン・アライアの、ショルダーが大きくボディコンシャスなジャケットは、経済力を背景にした強い気分を象徴するようでした。日本的な美意識が世界に衝撃を与えた時代でもあります。1981年にパリコレへ進出した川久保玲(コム・デ・ギャルソン)や山本耀司(ヨウジヤマモト)が、日本的な美(わび、さび、左右非対称など)を掲げてパリで賛否両論、話題をさらいました。

1979年にマーガレット・サッチャーが英国初となる女性首相に就任して以来、職場に就く女性が増え、ジャケットの役割も拡大しました。

2000s

ジャケットもボディコンシャスに着こなす時代

チューブトップの上から直接、短めのジャケットを羽織るというトレンドが誕生。ボトムにおいても、くっきりとラインを見せるスキニーパンツや、レギンスを合わせることが流行。こうした積極的な肌見せ、ボディラインを強調するトレンドは、男性を意識したセクシーさの演出というよりもむしろ、女性の強い自信の表れだったといえるでしょう。

(右)ランジェリーを彷彿させるキャミソールに、ジャケットを着用したケイト・モス。(左)ヴィクトリア・ベッカムは、コンパクトなジャケットにスキニーを合わせたスリムなシルエットが印象的。

2010s

ホワイトジャケットにTシャツやトートバッグをコーディネートした、アン・ハサウェイ。カジュアルなジャケットスタイルが一般的になりました。

スポーティ、ストリートなど異なるテイストをミックス

ウェルネスを追求するカルチャーの影響を受け、ヨガウェアやジムウェアにスニーカーを合わせ、その上からボマージャケットやリラックスしたジャケットを羽織る"アスレジャー"が一大トレンドとして定着。タウンウェアとしてのジャケットにも、スポーツ、ミリタリー、ストリートの要素をさらに、バリエーションが増えた時代でした。

1990s

バブル崩壊によってミニマルな装いの魅力が開花

バブルがはじけた影響が色濃く残る90年代前半は、80年代の高級志向とは対極にある、あえて汚れたように見せた「古くて新しい」雰囲気のグランジルックが話題を集めました。同じくバブル時代の反動から主流になったのが、ミニマリズムです。タイトなジャケットとスリムなパンツを組み合わせるトレンドを牽引したのは、ドイツ出身のデザイナー、ジル・サンダー。装飾から脱却し、本質を浮き彫りにするという美学によるミニマリズムは、逆に着る人の内面の豊かさを引き出すとされ、新鮮な視点が評価されました。

1992年に行われた「ジル サンダー」のショーより。ファッションにおいても物質的な豊かさより、内面的な美しさが注目されるようになりました。

(右)「サンローラン」の花柄ジャケットをまとったドミニク・サンダ。(左)オードリー・ヘプバーンはチェックのスーツを着用。柄物のおしゃれを楽しむセレブの姿が多く見られました。

2020s

トレンドも多様化。大胆なスタイリングが注目を集める

新しいトレンドがなかなか生まれないなか「ミュウミュウ」の提案によってノーボトムルックが登場。ビッグジャケットとウルトラショートスカートやパンツを合わせ、まるでジャケットだけでワンピースに見えるルックも話題を集めました。また、気候変動を背景として、ジレとは異なる発想で、ジャケットの構築的スタイルから袖を切り落としたアイテムも登場。環境保護意識の高まりを受け、リサイクルを前提として異なる素材を組み合わせることが必要とされるなど、素材への関心が高まりを見せています。

(右)注目を集めた「ミュウミュウ」の2022SSコレクション。(左)ビッグシルエットのジャケットが印象的な「ザ・ロウ」(2023年)。短いボトムとのギャップがインパクトを放ちます。

とりわけ1890年代のサイクリングの隆盛はジャケット拡大に多大な貢献をします。ジャケットは、実用性に加えてスピードと開放感を味わうための服でした。さらに、同時代には世界的に婦人参政権運動も活発になりますが、写真に残る当時のフェミニストたちはテーラーメイドのジャケットやスーツを着ています。男性社会の偏見と闘う女性に品位と威厳を与えるテーラードジャケットは、男女同権を主張する「ニューウーマン」と呼ばれた女性たちのシンボルにもなりました。

20世紀においても、政治や社会の情勢を反映しながら、ジャケットはそれぞれの時代に応じた"意味"を担い、多様な発展を遂げていきます。その展開を辿ると、ジャケットは常に女性の体の解放、精神の自由と手を携えながら社会の変化をあと押ししてきたことがわかります。

かつての女性たちが求めた自由がほぼ達成され、自信に溢れた女性をより魅力的にエンパワーするためのあらゆるデザインが出尽くしたかのように見える21世紀。素材も形も色柄も選択肢が豊富であるだけにいっそう、ジャケットは、着る人の社会に向き合う姿勢や繊細な感覚を伝えやすいアイテムにもなっています。地球環境への影響に対する配慮も必須。そんな時代に、私たちはどのようなジャケットを選び、どんなアティテュードで着るべきでしょうか。

これまでジャケットが辿ってきた歴史を振り返りながら、次の季節の自身のあり方を考えるヒントを見つけていただければ幸いです。